

「正伝後藤新平、第三卷台湾時代」を読む

公益財団法人交流協会専務理事 井上 孝

鶴見祐輔著「正伝後藤新平」（藤原書店刊）、あるいはその第三卷「台湾時代」は既にお読みでしょうか。この後藤新平伝は全8巻・別巻1の膨大なものであり、毎日出版文化賞を得ています。第二巻も「相馬事件」を巡る大活劇などを中心に、血沸き肉躍り大変に面白いのですが、やはり当職にあつては、第三巻を紐解くことが多くなります。

著者の鶴見祐輔は後藤新平の娘婿であり、60年代、70年代の代表的言論人であった鶴見和子、鶴見俊輔両氏の父にあたります。

私はこれまでも本コラムにおいて、台湾の経済発展の基礎は、日本統治時代に台湾内部に豊かに蓄積された農業資本であり、戦後蒋介石政権によって断行された農地改革によってこの豊富な農業資本が産業資本に転化されたことが契機になっていると述べてきました。

後藤新平が台湾総督府民政長官として大活躍した1898年～1906年の間が、台湾経済が日本本土の支援から自立し、農業資本が台湾内部に蓄積され始める時代であったことが、多くのデータをもって紹介されています。現在の台湾経済の興隆を考える上でも、本巻は措くことのできないものであると考える所以です。

後藤新平が民政長官として台湾の殖産興業政策を推進するにあたって、彼に全幅の信頼を置いて支持したのが台湾総督児玉源太郎であり、また部下として支えたのが殖産局長（心得）の新渡戸稲造でありました。

児玉源太郎総督及び後藤新平民政長官（当初は民生局長）が赴任した当時の台湾経済の状況は惨憺たるものであり、米、砂糖、樟脳等の主要農産物の生産力は低く、台湾内部の税収入によっては

台湾経営を賄うことはできず、日本本土からの補助金収入によって財政をどうにか維持している状況でありました。また、乏しい農業余剰もその多くは福建省を中心とした大陸商人、日本統治を嫌って大陸に渡った台湾商人、あるいはその背後にいる西欧商人により台湾外に持ち出され、台湾内部に蓄積されることがない状況が続いていたようです。

この当時、日本政界には、台湾経営はコストがかかりすぎ放棄すべきである、あるいはフランスに売却してしまえなどの意見すら出ていたようです。

このような状況を打開するために、児玉源太郎総督・後藤新平民政長官は、日本の財政規模の約8割にも達する台湾事業公債（当初計画6億円。結果3.5億円）の発行を本国政府・議会に認めさせ、鉄道、港湾、土地調査、給水事業などのインフラ整備に投入、また、樟脳、食塩、煙草の専売制度、さらに、漸禁策の一環としての阿片専売の導入、銀行及び貨幣制度の肅正、大陸に逃亡した台湾商人の帰島の勧奨等の政策の断行により、逐次、米、茶、砂糖、樟脳等の農業生産力を高め、さらに農業余剰の台湾内部での蓄積を実現し、台湾経営の経常経費を台湾内部の税収入によって賄える状態を実現していく状況が生き生きと紹介されています。

李登輝元総統が「今日の台湾は、後藤新平が築いた礎の上にある。」と本書を推薦している所以です。是非ご一読をお勧めします。

なお、申しあげるまでもありませんが、以上はすべて筆者の私見です。